私と彼女の100の話

ぷちらいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と彼女の１００の話

【Ｎコード】
Ｎ７７９３Ｆ

【作者名】
ぷちらいおん

【あらすじ】
私（宮本鈴夏）と彼女（篠原柚希）の何気ない日常を綴った１００の話

第1話　お題『絆創膏』（前書き）

この話は＞小説書きさんに１００のお題＜を元にして書いています。
微百合ものなので、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

第1話　お題『絆創膏』

ＡＭ：１０：２６

今現在、私達のクラスは、家庭科の調理実習の真っ最中である。

周りからは、トントンと包丁がまな板を叩く軽快な音と、食材を炒める香ばしい香りが漂う。

調理のお題は《野菜を使った料理》という、超アバウトなものだったりする。

「ふ～んふ～んふ～♪」

隣から聞こえてきた楽しそうな鼻歌に、思わず笑みがこぼれる。

鼻歌の少女こと藤咲（ふじさき）　柚希（ゆずき）は、身長１４３ｃｍ　体重３８ｋｇ　明るい色合いの短髪がとても印象的な少女だ。

ちなみに、彼女は私の数少ない親友であり、妹的な存在でもある。

小動物のような愛らしさと、幼い性格のためか、私は彼女のことが放っておけないのだ。

そのため、何かと彼女の世話を焼いてしまいたくなる。

彼女の方を見ると、楽しそうに野菜を切っていた。

小さな紅葉のような手で包丁を握り、もう一方の手で軽く野菜を押さえているのだが……正直かなり危なっかしい。

今も、ぷるぷると小刻みに包丁をつかむ手が震えている。
その様子にだんだんと心配になってくる。
その時――――
「――――っ！」
まな板の上に赤い雫が落ちる。
私の不安は見事に的中。
「大丈夫！？　ゆず手出して」
彼女の手をつかんだ私は、そのまま切れた箇所を指ごと自らの口に含んだ。
傷口から溢れた血が私の唾液と混ざり、喉を滑り落ちる。
指を切った痛みで涙目だった彼女は、その様子を見て恥ずかしそうに頬を染め俯いた。
普段の元気の塊のような彼女の姿からはあまり想像できない姿で、そんな表情もすごくかわいい。
「……っと、もう止まったみたいだね」
彼女の指を口から離し、絆創膏を巻いてやる。

「よし。これで大丈夫だよ」

黒目がちな瞳に溜まった大粒の涙を拭き、頭をなでてやると嬉しそうに目を細める。

ほんとうに、彼女はかわいらしい。

「鈴夏、その……ありがとね」

笑顔でお礼を言う彼女に、私は不覚にも一瞬ドキッとした。

どうやら、私は彼女の事が好きらしい。

それを再確認させられた。

まあ、薄々と気付いてはいたのだけれど……。

しかし、彼女の笑顔を見ていると思うのだ。

もし、私の想いを彼女に伝えた結果、この笑顔を翳らせてしまったらと……。

だから、私の気持ちを彼女に伝えるのは、まだまだ先のことになると思う。

今はただ、少しでも長くこの笑顔を見ていたい。

愛しい彼女の、この笑顔をずっと見つめていたい、そう強く思った――――。

第2話　お題『花火』

午後のＨＲも終わり、クラスメイトのほとんどは早々と教室を後にしていた。

部活動に向かう者、バイト先へと急ぐ者。

理由は様々だが、皆一様に忙しそうだ。

その点、部活動は無所属、バイトもしていない私と彼女はずいぶんとのんきなもので、今だにのろのろと二人して帰り支度をしていた。

ふと、隣席の彼女に目をやる。

今朝方、彼女の後頭部に発見したぴょんとはねた髪。

たぶん寝癖だろうが、なんだか可愛らしかったので、指摘しないでおいた。

案の定、全く気付いていないらしく、今でも今朝と変わらずそのままの状態であった。

そんなところも、なんだかすごく彼女らしくて可愛い。

「ゆず、今夜なんだけど時間って空いてる？」

「ふにゃ？　なんで？」

私は自分の手元にある、一枚の紙に目を落とした。

それは今夜、隣町で行われるらしい花火大会についての広告だ。

「ん～？」

ちょっと興味を引かれたらしく、彼女は私の手元（正確には広告）へと顔を近付ける。

そのため、先程より私たちの距離も近くなる。

思わぬ事態に私の頬が熱を帯びる。

「な、なんかね、今夜隣町で花火大会があるらしいのよ。えっと、もしよかったら一緒に行きゃっ……行かない？」

（うわっ、私のバカ。変なとこで噛んじゃって、すごく格好悪いじゃない……）

「ほんと！？　花火見に行くの？」

「うん、ゆずさえ嫌じゃなかったら、一緒にどうかな？」

「もちろん行くよ！　やった、花火だよー」

もし断られたらと内心不安だった私は、彼女が嬉しそうにＯＫしてくれたことで、ほっと息をついた。

それにしても、彼女のはしゃぎ様といったら、外見だけじゃなく中身までまるっきり小さな子供のようだ。

そんな姿に、思わず抱きしめたい衝動に駆られるが、ここは教室だと思いぐっと堪える。

（ふう、ちょっと危なかった……）

「じゃあ、今夜7時に現地集合ね」

「うん！」

彼女はよほど楽しみなのか、私の手を掴みブンブンと上下に振る。

思わず顔がにやけてしまいそうになり、あわてて表情を引き締める。

全くもって、今夜が待ち遠しくて仕方がない。

そのせいかどうか、今日はやけに時間が経つのを遅く感じた。

《第3話につづく》

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7793f/

私と彼女の100の話

2011年1月5日15時06分発行